

もつと気軽に 音楽会を楽しんでほしい。

●弟子屈は個性的な移住者が多い町だ。その中でも「元宝塚歌劇団花組」の経歴を持つ藤原多美さんは、ひとときユニークな存在といえるだろう。

「宝塚退団後に、田舎で犬を飼いながらできる仕事と考えると、ペンションぐらいしかならなかつた」という多美さんだが、小学生の頃から目指していたのはピアノで、高校卒業まではクラシック音楽漬けの毎日だったようだ。

常に音楽とともに歩んできた多美さんを象徴するように、開放的な景色が広がるペンションのラウンジにはグランドピアノが置かれている。実はここで2006年のオープン以来、年に数回、クラシックコンサートが開かれている。



屈斜路 ●「宿・花ふらり」経営

藤原光政さん、朋子さん、多美さん

プロの演奏家やプロを目指す学生による本格的なクラシックコンサートが、小さな町のペンションで催されるというのは珍しい。しかも格安な入場料なので、毎回、根室や帯広、北見などからもファンが訪れ、定員45人ほどの会場はすぐに満員になってしまう。大きな窓から雲の動きや風の流れを感じながら、音楽家と観客が一体となる臨場感は、大きなコンサートホールでは決して味わえないものだ。

「自分たちも楽しみたいし、地元の人にもっとクラシック音楽を楽しんでもらいたい」という多美さんと、裏方としてサポートする父の光政さんや母の朋子さん、他にも町内で協力者がいるそうだが、さて次はどんな演奏会が開かれるのだろうか。

●ふじわら たみ／京都府出身。クラシックのピアニストを目指していたが、音楽学校卒業後は宝塚歌劇団に。退団後、北海道でペンションを運営したいと思い立ち2006年にオープン。両親、愛犬たちとともに暮らす。

タンチョウを育む 自然を撮りたくて退職、 移住を決意しました。

●現在59歳の中島浩さんが、妻の陽子さんと弟子屈に移住したのは9年前。

それまでも道東には、忙しい仕事の合間をぬってひんばんにタンチョウの撮影旅行に訪れていた。特に田舎暮らしがしたかったわけではない中島さんだが、旅行中にたまたま見かけた温泉付分譲地のチラシに心が動いた。

「写真を撮るなら、こういう所に住みたい。定年まで勤めて、身体がきかなくなつてからは遅過ぎる」と思い、早期退職。温泉と静かな所が好きな陽子さんもそれに同意した。



熊牛原野 ●アマチュア写真家

中島浩さん、陽子さん

●なかじま ひろし／埼玉県出身。タンチョウの撮影で通ううち、この地に魅せられ温泉付の土地を購入、2001年に妻と移住。自宅の一角にある写真ギャラリーは、地元の撮影仲間や訪問客との交流の場にもなっている。

移り住んだその年、家の前の牧草地にタンチョウが降り立ったのには二人とも驚いたという。それまでは特別な撮影対象だったタンチョウが、ごく身近な日常として姿をあらわしたのでから無理もない。他にもキツネやエゾシカ、エゾユキウサギなどがやってくる。

タンチョウだけではなく、四季折々の自然をテーマに写真を撮る中島さんだが、「何年たっても、冬が一番好きなのは変わらない」と言う。その理由は、冬は自然現象にいろいろな変化があつて、冷えれば冷えるほど撮影の題材が増えるから、だそう。

こちらに来て知り合った撮影仲間とは、自宅のギャラリーに作品を持ち寄り、月1回ペースで例会を開いている。「言いたい放題」の刺激的、かつ和気あいあいとした勉強会のような。陽子さん近所の人から山菜の食べ方や牛乳豆腐の作り方を教わったり、ミニテニスやゲートボールなどのサークルに参加しながら、マイペースで弟子屈ライフを楽しんでいる。

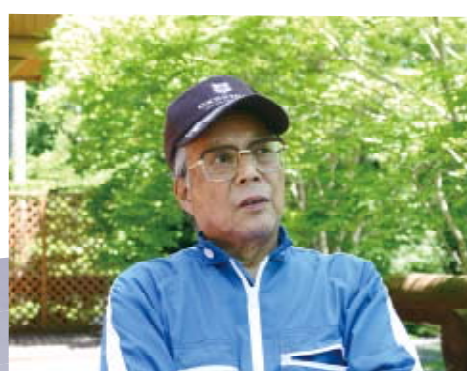
NEW FACE, NEW RESIDENTS

..... 新しい顔・新しい町民

●福岡県出身の小川秀夫さんは、長年九州や神奈川県で、アトピー性皮膚炎をはじめとする難治性疾患の温泉湯治療法に関わってきた人だ。

それは約30年前、薬を飲めば飲むほど悪化する一方だった妻の膠原病が、温泉に入つた時だけ容態が安定するのに気づき、積極的な温泉入浴を勧めて病気を完治させたことからはじまったそう。

以来、どんな病気の治療にも、薬物に依存する対処療法ではなく、身体を温め養生して自然治癒力を高める「湯治療法」を提唱・実践してきた。



南弟子屈 ●「フォレストイン摩周苑」経営 小川秀夫さん

温泉療法のパワーは 弟子屈の宝になると思う。

●おがわ ひでお／1939年生まれ、福岡県出身。妻の病気がきっかけで温泉湯治による自然免疫療法の研究をはじめ。2003年、弟子屈に「フォレストイン摩周苑」を建設し、ガン患者の救済を目指す。著書も多数。

そんな小川さんが、弟子屈の広大な原生林に宿泊施設用のログハウスを建てたのは、「このフィールドは究極だから、ガン患者の癒しの場にしようと考えた」からだ。

不治の病と思われているガンも、まだ体力のある段階なら、日に数回のぬるま湯入浴と生活を改善することで治すことができる、と小川さんは考えている。

「この見事な自然環境と豊富な温泉を利用すれば、この町は医療費節減、健康宣言の町として全国にもアピールできる」と、自らの研究データを引用しながら熱く語ってくれた。

●20代の頃から国内外を旅してきた中野孝之さんは、「広くて山があり、大きな湖や川もある。そんな景色が好き」という理由で、弟子屈を定住の地を選んだ。

2009年5月に弟子屈で結婚したさやかさんとは、ニュージーランド滞在中に知り合った。二人とも自然が好きなおから、「日本に帰国したら、緑があつて人が少ない所で暮らしたい」と新生活への夢を膨らませ、それが弟子屈移住につながったそう。

実は中野さんは、5年ほど前に弟子屈で暮らしたことがある。建築について学べる職業訓練校が釧路にあつたため弟子屈から通つたのだが、約10カ月間暮らしな

湯の島 ●酪農業手伝い／看護師 中野孝之さん、さやかさん



●なかの たかゆき／1975年生まれ、広島県出身。会社員をした後、国内や海外で放浪の旅を経験する。2008年にニュージーランドから帰国後、弟子屈へ移住。2010年10月には第一子が誕生する予定。

がら「ここは将来住む町の候補になる」とすでに感じていたらしい。

最初の滞在で多少の知り合いもあったおかげで、移住後はすぐに牛の削蹄の仕事が見つかった。さらに仕事で酪農家を回るうちに搾乳のアルバイトも頼まれる、といったように、人とのつながりが出来るにつれ、中野さんはもつといろいろなことに挑戦したいと考えるようになった。

訪問看護師として働く妻のさやかさんも、以前大阪にいた時に比べて、人や物が少ない分それに煩わされないの時間で時間に余裕が出来たという。

弟子屈の暮らしにそれぞれ手応えを感じながら、「いずれは土地を買って、動物を飼ったり野菜を作って自給自足できる暮らし」に向い、中野さんたちは一歩を踏み出した。

海外はあちこち旅したけれど 定住を意識したのは ここ弟子屈だけです。

